

ASCP って、何??

	代表者	高田桂佑 (医学B 3年)	
構成員	井上雄太郎 (医学B 4年)	相原正宗 (医学M 2年)	田中寿幸 (医学D 3年)
	荒木五月 (医学M 2年)	飯干美鶴希 (医学M 2年)	
	川野伶緒 (医学B 3年)	水間俊一 (医学B 3年)	
	横山勝巳 (医学B 3年)	吉本裕香 (医学B 2年)	
	藤井彩乃 (医学B 2年)	杜山麻美 (医学B 2年)	

1. 本プロジェクトの目的

私たちプロジェクトメンバーは、山口大学医学部保健学科検査技術科学専攻の在學生と卒業生（大学院生）で構成されており、卒業と同じくして、国家資格である臨床検査技師免許の取得を目指し、受験を行います。晴れてこの資格を取得した者のみが、医療機関等で臨床検査技師として働くことができます。この職種は名称や認定機関が異なるものの、世界各国に存在し、医療現場等で活躍されています。この臨床検査技師に世界的な変化が訪れました。それは、米国で最も大きな規模の臨床検査技師承認機関である ASCP (American Society for Clinical Pathology) が、世界的な臨床検査技師の標準化を行うことを目的とし、2007年から臨床検査技師の国際資格 ASCPi を発行するようになったことです。この資格は世界各国から受験が可能であり、2009年11月から日本でも受験できるようになりました。現状では、ASCPi を取得することにより医療従事者が米国で働くための VisaScreen を申請することができるなど、海外で臨床検査技師として働く際には有利となると考えられています。私たちは ASCPi に興味を持ち、この資格についてさまざまな方法を使って調べてみましたが、新しい資格であるため日本での認知度は低く、受験等に必要な情報が不足していることが分かりました。そこで、私たちはこの資格について知りたいという思い、また臨床検査に関わる多くの人がこの制度について知る機会を作るために、ASCPi に詳しい講師による講演会や、私たちが得た ASCPi に関する知識を共有できるインターネットコミュニティの立ち上げを企画するに至りました。

現在、日本の多くの大学で国際的に活躍することを視野に入れ、TOEIC や TOEFL を受験し、語学力を高めるアプローチはされていますが、“働くために必要な実践的英語力の向上” と “海外で働く資格の紹介・取得” を意図しているものは少なく感じます。私たちはこのプロジェクトを通じて、将来、専門職の方が国際舞台で活躍を狙うための、一つのステップになればと考えています。

2. 講演会の開催

前述のとおり、ASCPi の認知度は低く、得られる情報が限られているため、私たちはこの資格に関する正しい知識をつけるため、またそれを多くの方と共有するため、ASCPi に関する講演会を開催することを企画しました。この講演会は山口大学の学生、教職員はもちろん、山口県下の臨床検査技師、その他 ASCPi に興味をもたれたすべての方に参加していただけるようなオープンな講演にしようとの考えのもと、プロジェクト計画を練りました。

まずプロジェクトメンバーで、講演会の成功に不可欠な講師の選定をおこないました。その結果、坂本秀生先生に講演を依頼することを全員一致で決定しました。先生は、神戸常盤大学の教授を務められている傍ら、ASCPi の資格取得をサポートするアドバイザーをされています。またアメリカにおける臨床検査技師の制度についてリサーチを行われ、日米間の対比を行われた興味深い著書を複数投稿されており、本プロジェクトの講演の趣旨に最も合致する方であると確信しました。坂本先生に講演の依頼をさせていただいたところ、私たちのプロジェクトに多大な興味・関心をいただき、講演を快諾していただきました。

講演会を開催するにあたって課題となったのは、どのようにして山口大学関係者以外の方に講演会の開催をアナウンスするかということです。そこで、私たちは山口県臨床検査技師会にお願いをし、技師会のホームページに講演会を開催する趣旨の資料を掲示させていただきました。これだけでは技師会のホームページを見た方にしかアナウンスできていないので、技師会に登録している病院の検査部の住所を提供していただき、山口県下 118 の病院に講演会を開催する趣旨の資料を郵送させていただきました。この2つのアプローチにより、山口県下の臨床検査技師の方に講演会をお知らせすることができました。

10月23日土曜日、秋晴れのもとついに講演会の本番を迎えました。講演会への呼びかけの成果もあり、73名の学生と教職員、臨床検査技師もしくは臨床検査技師免許取得者の方に参加していただきました。遠くは徳山、萩、そして福岡からいらした方もおり、講演会の重要さを改めて認識させていただきました。講演は ASCPI に関する話題と日米間の臨床検査技師制度や実務内容の比較など興味深い話を約1時間30分、その後約30分は質疑応答にあてられました。質疑応答では、非常に活発に質問や意見が飛び交い、参加者の関心の高さを改めて実感しました。坂本先生をはじめ、講演に参加していただいたすべての方に感謝したいと思います。



講演会での模様 1



講演会での模様 2



講演会での模様 3



講演会での模様 4

講演後に参加していただいた方へ簡単なアンケートをさせていただきました。アンケート結果の一部を下記のグラフにまとめました。まず講演会前の ASCPi の認知度について、全体では 46% と約半数の方がこの資格を知っていたことが分かりました(図 1)。これは講演会の参加者の大半が学生であり、他の講義で先生方が学生に ASCPi について紹介する機会があったということ、またプロジェクトメンバーから話を聞いて興味を持った学生が自ら調べていたことが反映された結果であると考えられます。学生単独では、ASCPi の認知度は 57% と半数を超えていました。反対に臨床で働かれている臨床検査技師の方の認知度は 22% と全体に比べて低かったことが分かり、本講演により、多くの臨床検査技師の方にこの資格について知っていただく機会を作ることができたと考えています。また ASCPi という国際資格が存在したことは知っていたが、中身については理解していない方が大半であったため、講演会を通じて正しい理解が得られたのではないかと考えています。次に、本講演を聞いた後の ASCPi の取得の意思について、全体の 67% の方が ASCPi の取得に前向きに考えていることが明らかになりました(図 2)。しかし全体の 33% の方は、ASCPi について興味はあるが取得の意思はないとの回答をいただきました。最も多かった理由は、資格としての有用性が明らかでなく取得に前向きになれないという意見でした。前述のとおり、この資格は臨床検査技師の国際的な標準化を理念としていますが、日本の医療機関で働くうえでは、既に国家資格という日本国内における標準化の指標があるため、ASCPi を取得する必要がないという考えより、有用性が見いだせないという思いを持たれていると考えています。

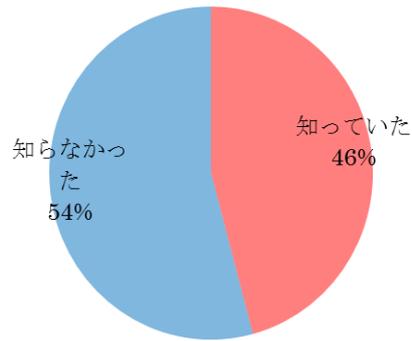


図 1. ASCPi の認知度について

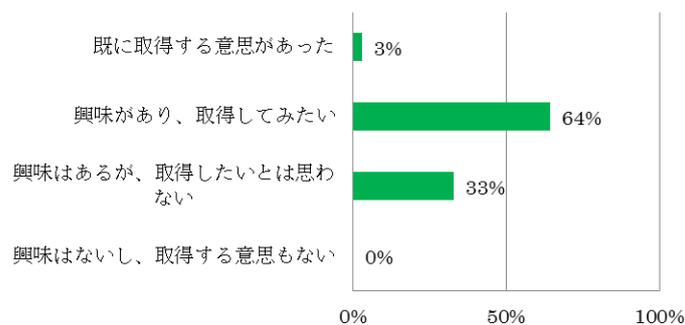


図 2. 本公演後の ASCPi の取得の意思について

本公演によって、山口県下の臨床検査に関わる方や学生へ ASCPi について知っていただく機会を提供することができ、参加者は臨床検査技師の世界的な新たな動きについて正しい知識が得られたと考えています。本講演会に参加してくれた学生の 60% は海外で働くことも視野に入れており、本公演が今後の活躍の一助になればよいと考えています。またアンケートで、ほぼ全員からこのような学生主体の講演会を継続して開催してほしいといった回答が得られたので、今後もこのような活動を続けられればと考えています。

3. インターネットコミュニティの開設にむけて

私たちは ASCPi に関する情報が少ないという事実と直面したため、この取組みを通じて ASCPi に関して私たちが得た情報を発信しようというもう一つのプロジェクトを計画しました。そこで、私たちは ASCPi に関するインターネットコミュニティの開設し、国際資格の受験方法などをまとめ、掲載しようと考えました。このインターネットコミュニティの立ち上げを、講演をしていただいた坂本先生に相談したところ、ASCPi の情報の少なさに苦慮し、私たちと同じように何か発信できる事はないかと考えられている方を紹介していただきました。その方は現在 ASCPi の受験申請中であり、共同して受験までの手続きをまとめインターネットコミュニティにアップし、今後受験を考えている方の参考にしていただこうという計画を立てました。受験までの手続きが複雑で難航しており、そのためインターネットコミュニティは未完成ではありますが、来年度も引き続きインターネットコミュニティの解説に向けた活動していきたいと考えています。このプロジェクトを通じて同じ考えを持つ全国の人と新たに知り合え、このプロジェクトを始めて良かったと切に感じています。

4. 謝辞

本プロジェクトを遂行するにあたって、プロジェクトの顧問をしていただきました高橋睦夫先生に厚く御礼申し上げます。また講演会の講師を快く引き受けていただきました神戸常盤大学の坂本秀生先生に心より感謝いたします。最後になりましたが、私たちの活動を陰ながら支えていただきましたおもしろプロジェクト 2010 に関するすべての先生方に深く御礼申し上げます。私たちはこの貴重な活動を通して得た様々なことを、今後に活かしていきたいと思っております。